

令和6年度 福井県立清水特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
【教務部】 1 教育課程・ 学習支援	個別最適な学び を実現するため の授業づくりに 取り組む。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 プロフィールシートを使って丁寧な実態把握を行い、将来身に付けさせたい力を明確にしながら個別的教育支援計画や個別の指導計画を作成した。 さらに、「個別最適な学び」の在り方を検討しながら授業づくりを行った。全教員を小中高混合の縦割りグループにし、全体研究会を年間4回（小学部2回、中学・高等部各1回）実施した。 研究会では、ビデオ視聴による児童生徒の学習の様子、学習内容、支援の方法などを話し合う中で、「個別最適な学び」の在り方について検討し、授業改善に役立てた。 また、保護者に対しては、学級懇談等で個別的教育支援計画や個別の指導計画を活用しながら、子どもに身に付けさせたい力を明確にするために、十分に話し合う機会を設けるよう努めた。また、連絡帳を通して、日々の様子や子どもの成長を伝えるよう努めた。 今後は、定期的にプロフィールシートの見直しを行い、次年度への移行支援等にも活用していきけるとよい。また、必要に応じて保護者との情報共有をさらに密に行っていくことが必要である。	今後も、プロフィールシートを作成しながら実態把握を丁寧に行い、定期的に見直しを行ったり、次年度への移行支援等に活用したりする。 また、保護者と相談しながら子どもたちの思いや願いの理解に努め、将来身に付けさせたい力を明確にして「個別的教育支援計画」を作成していく。 さらに、「個別の指導計画」においては、児童生徒一人一人に合わせたその子らしい学びや支援の在り方について継続して検討していく。そして保護者に対しては、必要に応じて情報共有をさらに密に行っていくよう努める。
【指導部】 2 生徒支援a	a 訓練や研修等を通して、教職員の危機管理に対する意識を高め個々の役割の理解を深めるとともに、児童生徒への防犯防災教育や保護者への理解啓発に努める。	【取組指標、成果指標は100%、満足度指標は95.8%…達成】 教職員を対象として食物アレルギー対応訓練、傷病者対応訓練、初期消火訓練を、児童生徒・教職員を対象として大雨・土砂災害対応訓練や地震・火災対応訓練、不審者対応訓練を行った。避難訓練では、より実際的な状況を想定したり、児童生徒への事前学習を丁寧に行ったりした。また、終了後には課題を洗い出し、危機管理マニュアルに反映させることで、防災・防犯の体制の強化を図った。保護者に対しては、「防災・防犯だより」の発行やホームページへの掲載を通して取組を伝えた。 今後も訓練等を通して、危機管理マニュアルの未更新や不備を修正し、より実際的な防災・防犯に対する体制の修正・充実と知識・技術の向上に努めることが必要であると考え	教職員の初期消火訓練において、消火栓の実体験についても取り入れたり、訓練の本部に関して、事前にリハーサルを行うことで各担当の動きを確認するようにしたりして、教職員の更なる知識・技術の向上に努めたいと考える。また、危機管理マニュアルの未更新・不備の部分について修正し、マニュアルの迅速な更新をする。
	a 学校行事において児童生徒が見通しを持ち、日頃の学習の成果を発表できるように、支援体制や環境の工夫、改善を行う。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 児童生徒の行事に対する心身の負担を軽減することを考慮して、これまで土曜日に開催してきた「体育大会」を「体育発表会」と改名し、平日に開催、内容を普段の授業で行っていることを保護者の前で発表する形で行った。また、「しみずっこのつどい」の発表内容に関しても、できるだけ普段の授業内容をベースに、行事のための特別な練習を極力減らすように取り組んだ。両行事とも事前の学習期間における児童生徒の混乱や負担が軽減され、当日の自然な形での実力発揮につながったと思われる。 児童生徒の主体的な取り組みに向け、今後も引き続き、行事の捉え方や内容の在り方について、職員間での共通理解を持ちながら検討を進めていくことが必要である。	しみずっこのつどいに関して、運営（平日開催、運営方法、発表内容の工夫など）や学校行事のカリキュラム的な位置付け、他教科との連携などについて検討・改善していく。

令和6年度 福井県立清水特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
【指導部】 2 生徒支援b	b 児童生徒の発達段階に応じた保健指導（成長、衛生、性、健診・検査練習など）を行う。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 健康診断や検査の前に、事前学習や検診の練習を行ったことで、前年度に検診を受けられなかった児童が受けられるようになったケースがあった。歯科衛生については、歯科検診に加えて希望者対象の歯科相談や、全校児童生徒を対象とした歯科医・歯科衛生士による歯磨き指導を実施した。歯の模型でブラッシング体験をしたり、歯の磨き方のアドバイスを受けた。また、小学部児童を対象にプライベートゾーンや人との距離の取り方などの保健指導を行い、さらに高学年には二次性徴についての話をした。変化していく心とからだについて学ぶ機会となった。これらの歯科指導の取組や、からだの学習の保健指導については、随時保健だよりやホームページに掲載した。 今後も、児童生徒の発達段階や特性に応じた取組を継続していく必要がある。	プライベートゾーンや二次性徴などの保健指導については、今年度は小学部を対象として行ったが、他学部にも広げていく。毎年繰り返し学習することにより、体の変化を受け入れたり、人との距離感を学んだりして定着を図る。
【教務部】 3 進路支援a	a 進路支援に関するアンケートや懇談会等から保護者が必要としている進路に関する情報や福祉サービスを把握する。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 保護者に進路アンケートを行った上で、事業所見学を2日に渡り、丹南地区2カ所（生活介護、B型）、福井地区2カ所（重身、B型）の事業所を設定した。また、変わりゆく福祉制度や現在取り組んだ方がよいことを知りたいという希望を受けて、進路学習会のテーマ設定をした。校内では進路に関する情報や福祉サービスを提供していけるように教職員向けの学習会を行って、将来に向けてどう考えていくとよいかについて講習した。 進路学習会は平日の午前中に行ったので、希望する保護者は参加できたが、教員がほとんど参加できなかった。保護者への適切な情報提供が行われるためにも、教員も参加できる時間帯での学習会の設定が望ましい。	夏季休業中に事業所見学1回と新しい情報に触れることのできる進路学習会を行う予定である。児童生徒のニーズに応じたサービスの情報提供を保護者に向けて行っていくよう努める。
【教務部】 3 進路支援b	b 保護者が必要としている進路に関する情報や福祉サービスについて、関係機関等から情報収集し発信する。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 事業所見学については「いろんな作業があり、一人一人に合った部署で作業し、みんな真剣に取り組んでいた。」や「住んでいる地域の事業所を見られて良かった。」等の保護者の感想が得られた。進路学習会については「自己決定の大切さを感じた。」という感想を多く寄せられた。子ども一人ひとりにはニーズが違うが、どの子どもにも共通の必要な力があることが伝わったと感じた。 課題としては、まだまだ具体的にそれぞれの子どもに対しての情報提供には至っていないことである。	進路アンケートや懇談会等から子どもたちや保護者の希望を把握すると共に、学部や進路担当者と情報共有・情報交換し、進路学習会や事業所見学に積極的に参加し、適切に進路情報を発信していくよう努める。

令和6年度 福井県立清水特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
【各学部】 4 交流及び共同 学習	a 同世代の児童生徒や地域の人たちとの関わりを通して、本校児童生徒の経験を広め、地域社会の中で生活する力を養う。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 今までの交流及び共同学習（出前授業・ワークシート・オンライン交流・事後学習など）を踏まえて、本校と相手校の児童生徒の双方にとって学びのある時間とするために何が必要かを検討した。担当者同士で話し合われた内容を本校クラスや学部で共有し、改良点などを話し合い、交流及び共同学習を実施した。実施後は、クラスや学部、校内全体で振り返り、今後の改善点を模索した。 小学部では、居住地校交流と学校間交流を行った。居住地校交流は毎年の積み重ねの中でお互いの理解が少しずつ深まり、関わりを持とうとする姿が多く見られた。学校間交流はペアを作り、ペア同士で相談したり関わりを持ったりしながら交流活動を行った。学校間交流の回数が例年より多く、行事との間隔が短くなったため、ゆとりを持った学習を行うことが難しいときもあった。 中学部では、地域の中学校の環境委員会と美術部の生徒と交流した。環境委員会とはペットボトルの受け渡しを行った。ペットボトルを作業学習で利用し、企業に搬入・換金して買い物をし、地域活動につなげた。また美術部とは粘土を使って共同作品作りを行い、作品作りを通じたコミュニケーションを楽しんでいた。外部専門家からは、導入としては交流内容はとてもよかったので、今後はさらに、共同学習を高めていけると良いと助言された。 高等部では、作業学習で革製品作りを行い、農産物販売所で地域の方々に販売した。接客を通じてお客さんと関わる中で、「ありがとう。」と声を掛けられたり、出来栄を褒められたりする貴重な経験の場となった。一方で、販売を通じて生徒が地域の方々と交流するという販売会の意義がお客さんにまだ十分伝わっていない点が課題となっている。	居住地校交流や学校間交流、地域の人たちとの関わりを通して、学校や児童生徒のことを知る機会を設け、関わりを深める。 また、地域の方に対する本校児童生徒や特別支援教育への理解啓発にも努める。 そして、クラスや学部、相手校と目標を共有し、相手校児童生徒の学びと本校児童生徒の学びを大切に、交流後の振り返りで交流当日の様子を学部で話し合い、次の交流につなげる。交流の質を大切に、より有意義な交流に繋がるようにしていく。 小学部の学校間交流については、相手校と時期を相談しながら児童に負担がかからないように、ゆとりを持って進めていく。 中学部は、交流でどのようなことをすると、もう一歩深めることができるか模索していく。 高等部では、日頃の作業学習の様子を紹介するポスターや各生徒の販売会の目標や生徒と関わる際の手掛かりなどを記した資料を販売会場に掲示するなどして、地域の方々に販売会の意義を伝えていく。
	b 本校の交流及び共同学習に関する情報発信や、児童生徒に対する理解啓発を進める。	【取組指標、成果指標、満足度指標共に100%…達成】 本校の交流及び共同学習の基本理念、各学部のねらいなどについて、交流相手担当者と事前に話し合いを行い共通理解を図った。また、交流及び共同学習に関する情報をおたよりやHPで発信した。 さらに、地域の中学校の美術部と制作した作品は公民館祭りや中学校の文化祭、地域での催し等で展示し、本校生徒や特別支援教育への理解啓発への一助となった。 また、高等部の販売会では、新聞報道をきっかけにして、プロの革製品作りの一般の方から、材料や道具の提供を受けるなど、広く本校を知ってもらう機会となった。 一方で、交流及び共同学習に関して児童生徒へのより深い関わりについて、どのように理解啓発を促していくとよいのか具体策に悩む声が教員から上がった。	事前の情報共有や目標の共通理解をしながら交流及び共同学習を行っていく中で情報発信や理解啓発に努めていく。 児童生徒へのより深い関わりについては、本校教員の実際の関わりをモデルとして積極的に相手校や地域に示していく。 また、児童生徒の好きなことや得意なこと、苦手なこととその対応策としての合理的配慮などの発信も併せて行っていく。